令和　元年　７月１５日

日本古文書学会大会参加者の皆様

石西の文化を学ぶれんげ草の会

再現された「中世の食」による懇親会のご案内

時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日本古文書学会大会へのご来場、心より歓迎申し上げます。

島根県益田市は、『大日本古文書』「益田家文書」のふるさとであり、「益田家文書」のみならず、史跡、神社・仏閣、庭園、美術品、仏像・仏画、町割りなど、様々な中世の遺産が多く伝わる中世のまちです。また、近年は「益田家文書」に残る、1568 年に益田藤兼・元祥父子が毛利元就に振る舞った料理の再現なども行われています。

日本古文書学会大会にご参加いただく皆様に、益田の歴史と特産品をぜひ味わっていただきたく、下記のとおりご案内いたします。

ぜひ、ご参加をご検討下さいますよう、よろしくお願いします。

記

１．懇親会

日時：令和元年 9 月 15 日（日）18 時から

会場：パステル（益田市駅前町 25-13）

内容：益田家文書に残る献立をもとにしたコース料理（厳密な再現ではないです）及び飲み放題（下の写真は平成 30 年度のもの。内容はかわる場合があります。）

会費：6,000 円　　定員： 18 名（先着順）

２．申込方法

・8 月 23 日までに e メールまたは FAX にて下記までお申し込みください。

・必要事項：氏名、電話番号（当日連絡がとれるもの）、メールアドレス、FAX 番号

・お申し込み先：石西の文化を学ぶれんげ草の会：事務局　村上

メールアドレス：pastel@maro-v.jp　　FAX：0856-22-6927

食×歴史文化のイベントをプロデュース
中世の食再現プロジェクト

中世益田の古文書「益田家文書」の中にある「祝い膳」の記述を元に、料理の再現や商品化、食のイベントの開催などを行っている、益田市内の食品製造業者や「食」の活動に携わる有志により2008年に結成した有志グループ。

近年は、益田市内の寺院など歴史ある空間を活用し、益田ならではの味わえない文化的な「おもてなし」をプロデュースしています。積極的な取り組みが評価され、2015年度島根県文化奨励賞を受賞しました。2016年には「おもてなし女子プロジェクト」を発足、料理の盛りつけや配膳を担当するなど、文化事業や観光ツアーとのタイアップなど幅広い活動に対応できる「おもてなし」の体制を整えています。

「よみがえる戦国の宴」2016年10月22日

益田家ゆかりの寺院(萬福寺)で、中世益田をテーマとした食と芸能を味わうイベント。益田藤兼、元祥父子が毛利元就をもてなした宴では観世太夫による能楽が催されたことにちなみ、祝い膳とともに能楽のパフォーマンスを楽しむ催しを実施。
出演／安田 登(下掛宝生流ワキ方)、槻宅 聡(森田流笛方)

地域学習、観光とも連携

各種バスツアーや研修とのタイアップのほか、ふるさと教育の一環として地域の小学生に祝い膳を味わい、地域の歴史を知ってもらう機会も提供しています。

[2016年度 事例]
- 海外自治体幹部交流協力セミナー
- 歴食JAPANサミット第2回大会in益田 など

「おもてなし女子」の活動

益田市立益田小学校ふるさと教育

中世の食とあわせて楽しむ 益田の歴史・文化スポット

益田兼見が興隆に奔走した「本道場」

時宗　萬福寺(じしゅう まんぷくじ)

南北朝時代に益田を支配下におさめた益田兼見が、応安7年(1374年)に開基として開いた時宗寺院。鎌倉時代の様式を残す本堂(重要文化財)と雪舟が築いた庭園(史跡及び名勝)が中世文化の粋を現在に伝えています。二河白道図(重要文化財)や平安時代の仏像など見どころが多い。

益田市東町 25-33　TEL 0856-22-0302

益田氏が特に「賞翫」した諸山禅院

臨済宗　医光寺(りんざいしゅう いこうじ)

医光寺の前身は崇観寺といい、貞治2年(1363年)に開かれたと伝わります。康暦2年(1380年)、益田兼見の周旋により、崇観寺は諸山に列せられ、兼見はこの寺を益田氏が特に「賞翫」(尊重)すべき寺院と定めました。雪舟は崇観寺の5代住職として庭園(史跡及び名勝)を築いたと伝わります。

益田市染羽町 4-29　TEL 0856-22-1668

現代の益田の文化的シンボル

島根県芸術文化センター「グラントワ」

島根県立石見美術館と島根県立いわみ芸術劇場の複合施設。様々なジャンルの展覧会やコンサート、伝統芸能などを楽しむことができます。石見地域特産の石州瓦を屋根と壁に合わせて約28万枚使い、中央に水盤のある中庭広場を持つ広大で美しい建築は、芸術活動の中心地であると同時に市民の憩いの場にもなっています。

益田市有明町 5-15　TEL 0856-31-1860（代表）

お問い合わせ ｜ 益田市観光交流課　TEL0856-31-0331

文化庁 Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
平成28年度文化庁
地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

発行 ｜ アートで楽しむ益田の歴史プロジェクト実行委員会
[島根県立石見美術館、中世の食再現プロジェクト、(公財)しまね文化振興財団(いわみ芸術劇場)]

益田 中世の食

毛利元就をもてなした祝膳を再現

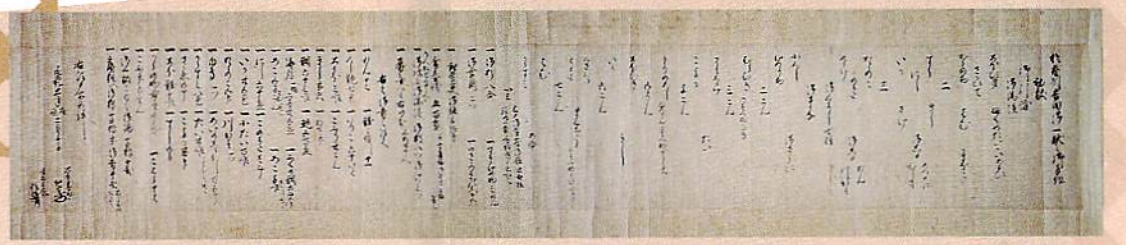
再現プロジェクト

Medieval Food
Reproduction Project

中世文化の薫るまち・益田

「益田家文書」には、毛利元就に振る舞った料理の献立と材料についての記録が残っており、これをもとに益田「中世の食」再現プロジェクトにより料理の再現が行われました。さらに、先に記したような時代背景なども、「益田家文書」に代表される古文書から、確かな歴史事実として判明しています。

益田には、益田氏の城・七尾城跡、館・三宅御土居跡（あわせて史跡「益田氏城館跡」）、港町の遺跡として史跡になった中須東原遺跡や、縁の深い神社仏閣などがそろって残り、中世の様子を全国随一といえるほどよく伝えており、中世文化の薫る町といわれます。



東京大学史料編纂所所蔵「益田家文書」の益田藤兼・同元祥安芸吉田一献手組注文
毛利元就に振る舞った料理の献立と材料が記されている

再現！戦国益田の縁結び御膳

益田藤兼が毛利元就に振る舞った料理には、「きし」（雉子）、「蚫」、「このわた」、「川おそ」、「白鳥」、「からすみ」、「さゑ」など、海・山・川の珍味が並び、「あこ」（飛び魚）、「あいのしらほし」（鮎の白干し）、「こうるか」（子うるか）などのこの地域の特産品も見え、その豪華さには戦国大名毛利元就も目をみはったと思われます。

そして注目されるのが「かとのこ」（数の子）と「こふ」（昆布）です。これらは北海道のあたりでとれますが、当時の北海道は蝦夷地と呼ばれ、アイヌの人々が主体的に暮らす地域でした。そのような地域の貴重な産物を入手していたことは、贈り物の中に見える朝鮮の「虎皮」とあわせて、益田氏が積極的に日本海交易を行っていたことを推測させ、益田氏はその「海洋領主的性格」が指摘されています。

中世の食　再現料理の一例
（左下）造り［いか、煎り酒］
（右下）はむ［飛魚、豆腐、自然薯、煎り酒］
（右上）酒浸て［鮭の塩引き、与三右衛門］
鮎の白干し［鮎の薄塩引き］
（左上）煮物［ごぼう煮物］／香物［奈良漬］

乱世を生き残れ！毛利元就も驚いた益田氏のおもてなし作戦

永禄11年（1568年）、益田（島根県益田市）の領主益田藤兼・元祥父子は、戦国大名毛利元就の本拠吉田郡山城（広島県安芸高田市）を訪れ、莫大な贈り物をすると同時に、豪華な料理を振る舞いました。益田藤兼はこの贈り物と料理によって、その実力を毛利元就に鮮明に印象づけました。この後、益田元祥が毛利元就の二男吉川元春の娘と結婚するなど、益田氏は毛利氏から一門に準じる扱いを受けて重く用いられ、江戸時代には長州藩の永代家老家となりました。

時代背景

天文20年（1551年）、陶隆房（のち晴賢）らは、主君大内義隆を長門大寧寺に追いつめて自殺させました。下剋上の典型として有名なこの事件に深く関わったのが、益田藤兼と毛利元就です。益田藤兼は石見（島根県西部）の、毛利元就は安芸・備後（広島県）の領主のそれぞれリーダーとして、陶隆房の下剋上に協力しました。

しかし、その後、毛利元就は陶晴賢と断交し、厳島（広島県廿日市市の宮島）の合戦で陶晴賢をやぶり、大内氏をも滅ぼして周防・長門（山口県）を支配下におさめました。陶晴賢と親密であった益田藤兼は、毛利元就と合戦になることを回避するため、和睦（講和）の道を模索しました。永禄11年の益田藤兼・元祥父子の吉田郡山城訪問は、益田・毛利両氏の和睦を内外に示すためのものでした。

重要文化財
狩野松栄《益田元祥像》
島根県立石見美術館蔵